



きょうされん第36回全国大会 in 東北・ふくしま

ここから 「つたえ・つなぎ・ はじめめる」



きょうされんの全国大会。東日本大震災を経験した東北6県の関係者のみなさんが“つたえ”たい思いをひとつにし、“つながり”的力を信じ、今を乗り越え、これからに向かい歩き“はじめている”ことを実感した二日間。「福島に来てよかつた」と多くの参加者が話していたように、全国大会に来なければわからなかつたことがたくさんありました。

今回の特集では、参加者みんなの心を打った、まさに今大会を凝縮したとも言えるオープニングを紹介しながら、全国大会 in 東北・ふくしまをふり返ります。

- とき 2013年9月21日(土)・22日(日)
- 会場 福島県郡山市熱海町磐梯熱海温泉 郡山ユラックス熱海
- 参加者 2400人（うち障害のある利用者1200人）

特集 きょうされん第36回全国大会 in 東北・ふくしま

はじめに申し上げたいことがあります。2011年3月11日からの大変な毎日を、命を守るためにあらゆることにとりくんできました。みなさん一人ひとりを深く尊敬いたします。それから福島県民に温かい手を差し伸べ、つながり、さまざまな支援をしてくださった方々にお礼を申し上げます。ありがとうございます。そして、この原発事故によって大きな荷物を背負わせることになってしまった子どもたち、若い人々にこのような現実をつくってしまった世代として心から謝りたいと思います。本当にごめんなさい。

みなさんは、福島はとても美しいところです。東に紺碧の太平洋を望む浜通り。桃、梨、りんご、くだものの宝庫、中通り。猪苗代湖と磐梯山のまわりには黄金色の稲穂が垂れる会津平野。その向こうを深い山々がぶちどっています。山は青く、水は清らかなわたしたちのふるさとです。

3・11原発事故を境に、その風景に目には見えない放射能が降り注ぎ、わたしたちは被曝者となりました。大混乱の中で、わたした

福島県民は静かに立ち上がっています

そして今、時間とともに次第に鮮明になってきたことは、眞実は

ちにはさまざまなものがありました。すばやく張り巡らせた安全キャンペーンと不安のはざまで、引き裂かれていく人と人とのつながり。地域で、職場で、学校で、家庭の中でも、どれだけの人びとが悩み、悲しんだことでしょう。

わたしたちは被曝者となりました

毎日、毎日、否応なく迫られる決断。逃げる、逃げない。食べる、食べない。洗濯物を外に干す、干さない。子どもにマスクをさせる、させない。畑を耕す、耕さない。何かに物申す、黙る。さまざまな苦渋の選択がありました。



武藤類子（福島原発事故告訴団代表）1953年福島県生まれ。版下職人、養護学校教員、共動作業所にんじん舎パート職員を経て、2003年、学校を途中退職し退職金をはたいて建てた家で、里山喫茶『燐（きらら）』を森の中に開店。エネルギー暮らしの方についての提案や原発に関する情報発信。2012年には東京電力や政府役人、学者などを刑事告訴する、全国14,716人からなる『福島原発告訴団』を結成、団長となる。

「ストップ原発メツセージ」

武藤類子さん

隠されるのだ。国は国民を守らないのだ。事故はいまだに終わらないのだ。福島県民は核の実験材料にされるのだ。莫大な放射線のゴミは残るのだ。大きな犠牲の上になお、原発を推進しようとする勢力があるのだ。わたしたちは棄てられたのだ。

福島県民は今、怒りと悲しみの中から、静かに立ち上がっています。子どもたちを守ろうと母親が、父親が。おばあちゃんが、おじいちゃんが。自分たちの未来を奪われまいと若い世代が。大量の被曝にさらされながら事故処理にたずさわる原発従事者を助けようと労働者たちが。土を汚された絶望の中から農民たちが。放射能による新たな差別と分断を生むまいと障害をもった人々が。一人ひとりの市民が国と東電の責任を問いやけています。そして、原発はもういらないと声を上げています。

わたしたちは今、静かに怒りを燃やす東北の鬼です。わたしたち福島県民は、故郷を離れる者も、福島の地にとどまり生きる者も、苦悩と責任と希望を分かれ合い、支え合って生きていこうと思つてます。わたしたちとつながつてください。どうか福島を忘れないでください。

つながつていくことが わたしたちの力



■青森県・あいゆう工房
みんなでひとつのお部屋
みなさん ■
集まりました

その地震は突然襲いかかりまし

た。わたしたちの工房は築130年以上の旧小学校です。ミシッ、ミシッと大きな音がして、これはただならぬ大きな地震だと感じた瞬間、電気も消えていました。揺れは3、4分続き、その後もしばらく揺れを感じていたのを憶えています。

地震直後は職員の的確な避難誘導のおかげで、安全な屋外に避難しました。それから建物の安全確認が済んだ後は、みんなでひとつの部屋に集まりました。幸いわたしたちの工房は薪ストーブを使っていたため、暖をとることができ

ります。それはわたしたち自身の生き方、暮らし方です。わたしたちは、何気なく差し込むコンセンサトの向こう側の世界を想像しなければなりません。便利さや発展が、差別と犠牲の上に成り立っていることに思いをはせなければなりません。原発はその向こうにあるのです。人類は地球に生きるだけ一

種類の生き物にすぎません。
わたしはこの地球という美しい星と調和したまゝとうな生き物として生きたいです。ささやかでもエネルギーを大事に使い、工夫に満ちたゆたかで創造的な暮らしを紡いでいきたいです。

原発をなお進めようとする力が、垂直にそびえる壁ならば、限りな

く横に広がり、つながりつづけていくことが、わたしたちの力です。わたしたち一人ひとりの背負つていかなくてはならない荷物が途方もなく重く、道のりがどんなに過酷であっても、目をそらさずに支えあい、軽やかにほがらかに生き延びていきましょう。

3・11あのときわたしたちは 東北6県仲間の詩、歌で紡ぐ構成詩

ました。

その後、送迎車で自宅まで帰る途中は、信号機も止まり、交通も混乱しており、自宅も当然停電でテレビもつかず、唯一石油ストーブがあつて助かりました。情報源のラジオからは大きな被害。その中でも一番衝撃的な情報は、地震直後に発生した巨大津波の被害情報でした。聞いたことのない大津波警報など、本当に不安でした。幸いわたしたちのなかま、身近な人には怪我などの被害もありませんでした。

特集 きょうされん第36回全国大会 in 東北・ふくしま



■岩手県・あすなろホーム

熊谷正弘さん ■

食べるのもあんまりないし、
とつても寒かった

3月11日、僕はあすなろホームで働いていました。立っていられなくてみんなでテーブルの下に入りました。何度もすごく揺れて怖がったです。

夜、弟が迎えに来てくれたけど、家には津波が入ったので、高台に行き、車で寝ました。食べるものもあんまりないし、とつても寒かったです。

それから、とても悲しかったことが2つあります。僕の話をよく

平日はあすなろホームで働き、休日は友達とアットホームの会で集まれるようになりました。それに親友とは、電話したり、たまに会ったりできるようになりました。少しずつ僕の心の復興は進んでいます。

れみんなに』。

ありがとうの「と」。「ときめいた気持ちで」。

ありがとうの「う」。「売上アッピ 売るぞ！かりんとう」。

全国のみなさんに感謝しています。ぜひ、いらっしゃる女川に遊びに来てください。がんばっぺ、いらっしゃる女川。

■宮城県・きらら女川の
みなさん ■

がんばっぺ

全国のみなさんのおかげで元気に大会に参加することができました。

大きな声で「ありがとう」。

ありがとうの「あ」。「明日への活力 あきらめないで ありのままの自分らしく」。

ありがとうの「り」。「凜々しい気持ちで 立派な商品を 量より質」。

ありがとうの「が」。「ガツツを忘れずに がむしゃらに がんば

■福島県・結いの里
青木久恵さん ■

起きて、食べて、寝る
人間として最低の生活でした

あのとき、わたしたちは、福島



第一原発から10キロの場所にいました。次の日の朝、町中にサイレンがなりました。原発から放射能が漏れる可能性があるというのです。30キロ先の小学校の体育館にグループホームの職員と一緒に住んでいる人たちと車で避難しました。その時から今もつらい避難生活がはじまっています。

夕方からの食べ物は、おにぎり1個と500mlの水です。体育館に避難している時、そら恐ろしい原発の爆発の映像を見ました。その後、他の事業所のみんなと合流した後は、お弁当をつくっている部署に食料があったので、三度の食事の

心配はいらなくなりました。けれど、飲み水は出ません。それで運んでもらいました。朝夕、顔を洗うのも思いつかず、風呂に入ることも忘れていました。起きて、食べて、寝る。それだけです。

人間として最低の生活でした。困ったのはトイレで、使用した後も流す水がなく、近くの古井戸からみんなで汲んでいました。やがて水道水が出たので、アパートに移り、こたつで暖を取ることもでき、人並みの生活になりました。そして、長い長い避難生活が今でも続いています。

地震の前まで住んでいたグループホームがあつた場所は、避難指示が出ていてまだ戻れません。今、わたしは仮設住宅の中に建つたグループホームに住んでいます。

■福島県・生活介護アライブ

中村純子さん

ヘルパーさんが車の中で一緒に待つてくれた

3月11日2時46分。わたしは生活介護アライブの実習最終日だった



■秋田県・虹の家 鈴木總さん 夢・究明日葉 伊藤雅人さん ■

日常と違う生活は慣れないものでした

電話も通じず、迎えに出た両親と行き違いになりましたが、両親が帰るまでヘルパーさんが車の中で一緒に待ってくれ、とても心強かったです。余震や雪が降ったりの状況でしたが、安心して待つことができました。

実家は地震の影響もなく電気も食べ物もあり、普通の生活ができます。しかし、原発事故の後、母の実家や猪苗代湖の旅館に両親と避難しました。いわきに帰つてからも実家で生活し、3カ月経つ頃、ようやく元の一人暮らしに入りました。地震の影響で津波が

地震の時、アライブにいたこと、ヘルパーさんに助けられたこと、両親がまだ元気なことでなんとか乗りきることができました。

わたしは虹の家で電気がとまつた二日間、とても心細かったけど、震災地のみなさんはもつと不自由で怖かったです。あまりにひどすぎる状況でしたが、あれから2年経ち日本全国どころか海外からの支援のおかげでようやく復興してきました。10年後、20年後にはもっといい町ができます。

起きて、町は流されてなくなっていました。あまりにもひどく、どうなってしまうのか心配している中、原発事故も発生しました。わたしは虹の家で電気がとまつた二日間、とても心細かったけど、震災地のみなさんはもつと不自由で怖かったです。あまりにひどすぎる状況でしたが、あれから2年経ち日本全国どころか海外からの支援のおかげでようやく復興してきました。10年後、20年後にはもっといい町ができるかもしれません。



特集 きょうされん第36回全国大会 in 東北・ふくしま

きる信じています。震災を通して助け合って生きることはすばらしいということを学んだので、わたしもできることから実行しようと思いました。

東日本大震災が起きて3週間後、はじめて宮古支援センターに入った。瓦礫の山、大勢の自衛隊員、戦争でも起きたのかと思うほど異様な雰囲気。息が詰まり呼吸もままならない。支援に行く先々で聞く津波の恐ろしさ。かける言葉もみつからない。それでも被災した方々よりかけられる「ありがとうございます」の言葉。涙が止まらなかつた。

現状に目を背けたら何も変わらない。壊滅状態の作業所の片付け、掃除。肉、野菜、果物たっぷり持参での炊き出しボランティア。運搬車両の寄贈。生活支援、調査活動。まだまだ十分ではないが、一步一步進んできた岩手。わたしたちは誓いました「必ず乗り越えてみせます」。

支援に行くたびに新しい岩手。笑顔があります。これからが本当のはじまりです。「ありがとうございます」への「ありがとう」のために。全

構成詩に続いて『風になりたい』の大合唱。大会キャラクターの着ぐるみも登場し、会場はとても盛り上がりました。

2011・3・11あの日から
全国から多くのチカラをもらい
東北はがんばっています

地震から少し経つた後、岩手や宮城、福島からなかなかみんなが避難してきました。ほっとけない。みんなで助けた！

国のみなさんに感謝して「東北は必ず生き返ります」。

■山形県・いなほ作業所のみなさん ■

ほっとけない。
みんなで助けた！



福島県あすなろホームのみなさん



『風になりたい』を大合唱し終えた出演者たちが、ぞろぞろと舞台を降りていきました。たくさんの事業所が、メンバーや職員らと共に舞台をわかせた大合唱。どんな面持ちで退場していくのかを一目みたくて、会場の外へと追いかけてみました。

ベンチに横一列になって水分補給をしている方々を発見。「今、出演されていた方々ですか?」「はい! そうです」と口々に返事が返ってきました。「カラフルなタオルが、とっても目立ってきれいでましたよ! すごくすてきな舞台でした。」と声をかけさせてもらい、TOMO の取材ということで、出演してみての感想を伺ってみました。「毎日練習したの! 毎日!」、「毎日ね、朝の会のあとやったんだよ、毎日」。この“毎日練習”がみのった今日、そ

ういう顔をみなさんしていました。「そんでね、タオルが新しいから、ブンブン回した時にさ、ほこりがすごくってすごくって、目がいたかったの」そういった愉快な感想まで。

視覚障害のある方が繰り返し聞いてきたのは「どうでした? わたしたちきれいにできました?」ということ。どんな風に見えていたのかを聞いて「よかったぁ」と笑みがこぼれました。「早くね、福島に明るい未来がくるようにね、がんばるよ。笑いかいっぱいになるようにな!」。

最後に話してくれた言葉が印象的でした。元気なあすなろホームのなかまのみなさんをファインダーにおさめて、その場を後にしました。(編集委員 齋藤加奈子)

都山駅で出会ったおしゃべりな駅員さんや磐梯熱海駅から会場まで歩きながら見たすばらしい景色。東京からきたわたしの最初の感激でした。参加したみなさんにもそれぞれ感激があったと思います。これからはTOMO編集委員の「全国大会の感激」。全国大会のエピソード集です。（特集担当 河上 恵三）

全国大会の感激

全国大会は再会

どこかで会ったあの人と再会できましたか？

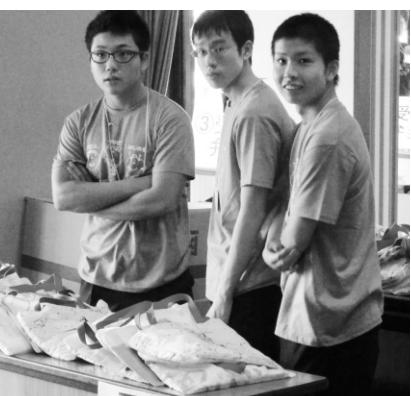
小山さんは驚きました

被災地支援に行った時に同じグループだった方に再会するというには、全国大会ならでは。中でもいわて支援センターの小山さんには驚きました。

「ここにちは」とあいさつすると「あ、Tさん」と名前を言うではありませんか。たくさんの方々と一緒にいるのに、すぐに名前と顔が一致するなんて！ 私も「最近物忘れが…」と歳のせいにしないよう心がけようと思ふ島を後にしてしまった…。



現地に支援に入った人たちがメッセージを寄せ書き



高校生ボランティアのみなさん

「肩の力を抜いたら？」
「こんちわー！」「どっからきたの？」「わたしもおんなんじ！」。利用者部会「はたらく」の報告会が終わって会場内を出ようとした際、突然1人の女性の利用者さんに声をかけられました。被災地の大変な状況報告を聞き終わった後の不意な声かけに、驚き、戸惑い、そして少しばかり安らいだ気持ちになりました。言い終わった後、足早に去つて行く後ろ姿を見ていると、たくましささえ感じました。

今回の全国大会参加は、同じ職場で働く利用者さん同士が、参加をきっかけにつながる「もうひとつ縛」づくりを目的にしていましたが、こちらは気があせるばかり。「肩の力を抜いたら？」と言われた気がした出来事でした。

(F)

ボランティアの学生さん

オープニングのステージを観ていると、ひとりの看護学生が涙を流していることに気づきました。

「どうして泣いていたの？」。「障害のある人たちはわたしたちよりももっと大変な状況にあることを知つて」。今回の大会ではたくさんの学生さんがボランティアや出演者として協力してくれました。若いみなさんが、将来は人を助ける仕事をしたいと言っているのを何度も耳にしました。

(K)



太田看護専門学校のみなさん

全国大会は出会い

新しい出会いはありませんか？

特集 きょうされん第36回全国大会 in 東北・ふくしま

全国大会は食

地酒においしい料理。
忘れられない二次会でした。

お仕事中の事務局員さんを呼びとめ、ボーズをとつてもらいました。

おもてなし

「おつまみ程度」と聞いていた交流会2（二次会）。立派な食事でびっくり！ 作業所製品のパンやワインナーがセルフサービスで置かれ、東北名物の食べ物やお酒も振る舞われていました。

でも、茶色い食品だけがみなさん手を付けずにいつまでも残っている…。それはタケノコと一緒に煮た「車麩（くるまふ）」。お麩をメインに食べるという習慣は東北地方だけなのかしら？ 残ったお



になり、秋田のいぶりがっこやパンを持ち帰り、おいしくいただきました。東北は食べ物もお酒もおいしい！

(Y)

「当たり前前の暮らしがどれほど大切なことか」というにんじん舎の和田さんの言葉が心に響いています。

(N)



全国大会は思い出

持ち帰る思い出はたくさんありましたか？



大会前、東北ブロック会議に集まったメンバーで穴沢氏の墓参りをし、墓前に大会成功を誓いました。

中心にいた穴沢さん

大会2日目の一般公開シンポジウム。会場からの発言で「ぶれない、こびない、あきらめない」という発言。まさにきょうされん福島支部の活動、東北ブロックのつながりを象徴する発言だと思いました。その中心にいたのは今年3月に急逝された穴沢さん（元福島支部事務局長）なのですよね。

(I)



赤い屋根メンバーと飯盛山にて。多くのスタッフさんに支えられて、登ることができました。

飯盛山の散策では段差や坂道がたくさんありました。それでもバリアフリーでした。人に助けられ、不自由なく観光できました。集団のペースについていけない人にも、ちゃんと観光説明するスタッフさんがついてくれました。一人ひとりを主役にしてくれました。それぞれが、「自分が主人公で自分のために歓迎してくれている」と思える観光コースでした。

(B)